

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校
2019. 2. 1



「学校評価から」

泰日協会学校シラチャ校 校長 久光靖男

今日のシラチャは朝 6 時 43 分に日の出が始まり、午後 6 時 15 分ころ日の入りでした。これから雨期に向けて少しずつ日の出が早まり、7 月をピークに再び日照時間は短くなっていきます。この時期の真っ赤な朝日はとてもきれいで、心地よい風と相まって心が洗われるような気持ちになります。朝日が昇る直前まで南の空には「南十字星」が光ります。早起きは三文の得といわれますが、みなさんはご覧になりましたか？

さて本年度の教育課程が 2 ヶ月を残すのみになりました。日々の丁寧な授業だけでなく、10 年の節目となるシラチャ祭や運動会などの行事を通して、学校教育目標に沿ってその具現化に取り組んできた 1 年でしたが、保護者のみなさんから学校評価としてたくさんのご意見をいただき心より感謝申し上げます。

教育目標に関すること

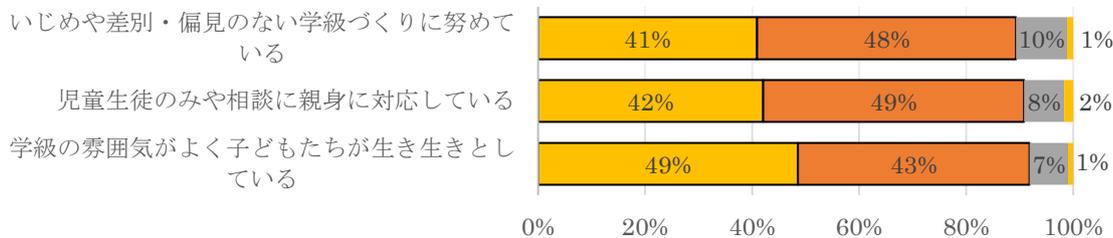
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 思わない

保護者の皆様からいただいた学校評価アンケートで上記の 4 つの項目は「やや思う」という回答を合わせ、概ね良いというご意見をいただいたものです。

学年・学級に関すること



■ 思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 思わない

学年学級に関する 3 つの項目については 10% 程の方から「あまり思わない」という評価をいただいています。各クラスでの一人ひとりを大切にされた学級経営が保護者に伝わっているかという事も含め、職員として更に襟を正し、児童生徒の学校生活が充実するよう取り組みを進めていく必要があると感じているところです。

年度末の学習のまとめと合わせて、次年度計画の立案を行っていく時期です。一つひとつの項目について振り返り、深く考えていく中こそシラチャ校が向かう姿が見えてくると思います。本校の課題に今後も継続して取り組んでいきたいと思ひます。

修学旅行を終えて

1月21日～24日、中学部2年生はシンガポールへ修学旅行に行きました。「多様な民族の共生」「平和学習」「集団行動」この3つを目標に掲げ、10月から事前学習に取り組んできました。

とりわけ時間をかけ、生徒たちも心待ちにしていたのが、Brother&Sister 班別活動です。班ごとにテーマを決め、シンガポールの町をシンガポール大学の学生と共に英語で会話をしながら散策する活動です。ホテルを出発してゴールのマーライオン公園までの6時間、先生がいるチェックポイントを2か所回り、自分たちが計画したルートを巡っていきます。移動の主な手段はMRT(地下鉄)です。日本ともタイとも異なる切符の買い方に四苦八苦したり、切符を電車とホームの間に落としてしまったりなどのハプニングもあったようです。また、ペーパーチキンで有名なお店の予約を事前に入れて、昼食時間に向かうなど、周到にリサーチしていた班もありました。どの班も大学生の助けを得ながら、ゴールのマーライオン公園まで無事たどり着くことができました。達成感と安堵感の入り混じったとてもよい表情をして戻ってきた生徒たちの姿を見て、私たちも本当にほっとしました。

同じ日の夜、お世話になった大学生と夕食を共にし、英語でディスカッションを行いました。年齢の早い段階から、進路が振り分けられていくシンガポールの教育システムに驚きながら、興味をもって質問し、充実した時間を過ごすことができました。最後には、名残を惜しみながらのお別れとなり、これら「人との出会い」も生徒たちにとって大きな思い出や財産になったのではないかと感じました。



もうひとつ時間をかけて取り組んでいたことは、平和学習です。日本がシンガポールを侵略した歴史を学ぶ Surviving Japanese Occupation(旧フォード工場)では、英語で書かれた展示物や映像に熱心に見入り、事前に学習した内容を確認していきました。シンガポール人のガイドさんも、生徒たちの学ぶ姿に「感謝します。」と言葉を投げかけておられました。記念碑で誓った8-1 平和宣言。ふたたび戦争をしないために、自分たちが今できることを確かに宣言しました。

このほかにも、多くの場面で「文化」を感じ「平和」をかみしめ、「集団」で行動することの難しさや楽しさを学んだ3泊4日であったのではないかと思います。とても充実したプログラムで密度の濃い学習を行うことができました。多くの方々の支えがあって無事に終えることができたこと、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(文責：田中 康世)

シラチャ校の何人の人と話したことがありますか。

坂本勤さんは、北海道の元中学校国語科教員で、私の尊敬する人です。中学生の内面を描いた本を多く出版しています。坂本先生の著書『タマゴマンのもと』に「ぼくは一生のうちに何人の人に出会うのだろう。」というお話があります。みなさんは、ここシラチャ校で、今まで何人の人に出会い、話したことがありますか。出会いと別れの機会が多いみなさんに読んでもらいたい作品です。この場をかりて紹介させていただきます。

ちなみに、これが坂本先生自作のキャラクター、タマゴマンです。
タマゴマンは、札幌市にある中学校に通うごく普通の中学生です。



ある朝、先生は、「クラスのみんなどの出会いを大切にしてください。一生のうちにお話をお話できる人は、ほんの少しなのでから。」という話をしました。タマゴマンは、ほんの少しというけれど、何人ぐらいなのだろうと考えてみました。まず、家族がいます。お父さんに、お母さん、そして妹、おじいちゃんに、おばあちゃん。そしておじさん、おばさん。いとこと、めいとおいを数えますと25人です。

保育所の友達や先生、もう思い出すことのできるのは、10人ほどしかいません。写真を持ち出してみました。顔だけは覚えているという人をあわせても、20人です。

小学校は3回クラスが変わりましたから、その全員と話したとしても100人ほど。先生を入れても105人。中学校に入って、34人、そして、先生が10人。3年間で150人。でも、その中の半分は小学校の時、一緒でした。

いや、まだまだいるはずだ。近所のおばさん、塾の友達。でも、あいさつする程度の人しか思いつきません。

お母さんに聞いてみました。お母さんが、それから会った人も、中学2、3年で50人、高校で50人。大学にいても50人ぐらい。会社に入っても、50人ぐらい。お客さんを相手にお仕事をする方ならもっと多いかもしれないけど、一生のうち、1000人の人とできたら多いほうじゃないのかしら。先生のような仕事の人はもう少し多いかもしれないけどね。

タマゴマンはウンとうなってしまうました。「わたしたち地球に生きている人間の数は70億人程度です」と、社会の授業で、この前、習ったばかりです。70億人も人間が生きている狭い地球の上で、一生のうちに、お話できる人が1000人程度しかないなんて、いやいや、もっともっとできる。タマゴマンは思いました。ぼくは世界中の人と話をしてみるんだと思いました。でも、とタマゴマンは思いました。今のクラスの人たちの何人と自分は話をしたことがあるのだろう。あいさつさえ、したことのない人もいないのではないか、学級写真で調べてみました。

この人とは話したことがある。この人とはない。数えてみると、話したことのある人は19人でした。なんだか悲しいような気持ちになりました。34人しかいないクラスの全員と、話もできない自分が、ちっぽけで、みっともないような気持ちになりました。おじいちゃんの田舎の空で、たくさんの星をみたときに感じた気持ちと同じでした。

引用 坂本 勤(2011)『タマゴマンのもと』(北海道新聞社)

朝、あいさつ運動でみなさんとあいさつを交わしているところこの話を思い出します。シラチャ校には、多くの児童生徒がいるけれど、私は何人と話したことがあるだろうと。もうすぐ、1年の修了を迎えます。クラスが変わったり、学校が変わったり、また別れがあるでしょう。ぜひ、3学期の残りの期間に話したことがない人に勇気を出して話しかけてみましょう。普段、小さな声でしかあいさつをしていない人に頑張って元気なあいさつをしてみましょう。ここでの出会いを大切にしましょう。

(文責：松本 真帆)